あの素晴らしい愛を

落窪よしお

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【あらすじ】

アイリスとコクリコの二人は帝都を目指し旅立った。帝都で催される結婚披露宴へ巴里華撃団代表として出席する為である。その見送りの帰り道にエリカは飲みに行こうと提案した。

二人の隊員を欠いた巴里花組、そしてエリカの一ヶ月と少し。この期間にエリカがすべき重要事項は二つ。危険地域の実態調査とプリン作りである。

【この作品について】

本作は同作者による二次創作「エチュードの終わり」（作品ＩＤ：７７６１４）の続編

です。但し本作だけでも全く意味が通らないということはないと思います。
原作設定はサクラ大戦４までを考慮。一応シリアス展開…にしたつもり。
よろしければ縦書きにてお読み下さい。
原作設定を追いきれていないのは御愛嬌、適宜脳内補完して下さい。
【一言】
本作を以て作者の中での（笑）サクラ大戦の世界観は完結させられました。これで作者の脳内では帝都ヒロインも巴里ヒロインも皆幸せとなって、大満足です。お読み頂いた方々、どうもありがとうございました。

目次

前篇 1
中篇 12
後前篇 26
後後篇 36
エピローグ 59

前篇

始まりのテーマ：あの素晴らしい愛をもう一度

アイリスとコクリコを乗せた汽車は王国沿岸を目指し、遥か視界の奥に走り去った。その車両は奇しくも――と言う程のこともないが、五年前に巴里華撃団が隊長大神一郎を送り出したそれと同一であった。

「お二人…どうか御無事で」花火が呟く。

「ああ、二人には何としても帝都に着いてもらわねばならぬ」グリシーヌも今や点となった汽車をなお見詰めながら、感慨深げに言う。

「さーて、二人を見送ったしアタシ達は――」

「飲みに行きましょう！」エリカが力強く叫ぶ。その言葉に三人は驚きと呆れを同時に示した。

「エリカさん？今なんと…」

「飲みに行こうと言ったんです！さあ、皆さん行きましょう！」そう言って一人大股で先導する。三人は乗り気でない足取りを、無理やりエリカに引き摺られるかの如き調子で

付いていく。
「ちょ、ちょっと待てエリカ！何を飲もうと言うのだ」
「飲むと言ったら目的語は決まってます、人類の友、お酒です！こんな日には酒を飲まなくちゃやってられません！」
「おい、馬鹿言えこの阿呆隊長、まだ朝の八時だろうが！」
「エリカさんのロベリアさん化ですわ」
「いーえ、飲むと言ったら飲みます、あ、ロベリアさん良いお店紹介して下さいね！」
図らずも他の駅利用者を威嚇せんばかりの歩調で進むエリカから距離を取り、三人は顔を見合わせた。「どういうことなのだ」
「コクリコさんとアイリスさんが行ってしまった不安を紛らわそうとしているのでは？」
「酒でか？あやつから酒を飲もうと言うなど、これが初めてだぞ」
「……」
「ロベリアさん？」
「飲みたいんだろうさ…」
「答えになっておらぬ」
「まあ、少しだけならいいんじゃないか？たまには朝酒もさ。それに、アタシらは飲みた

くないと言ってあの阿呆を一人で酒場に行かせる方がアタシは気掛かりだ」
「ロベリアさんの意見に賛成です」
「むう…」グリシーヌはエリカを見やった。一応三人を誘いはしたが、エリカは三人が付いて来ているかなど気にしていない様子であった。「少しだけならば…よいか」

何日か前、帝都の大神一郎から巴里華撃団宛に手紙が送られてきた。曰く大神一郎と真宮寺さくらは結婚し、大帝国劇場でその披露宴が催されるとのこと。そこで巴里花組副隊長のアイリス並びにコクリコが、巴里華撃団代表として極東へ向かうことになったのである。

無論、巴里花組全員が東京行の汽船へ搭乗することを希望したが、人員不足の悲哀から東京旅行が許されたのは二名のみ。現在の巴里華撃団はグランマの指導の下、強力な組織になるべく大規模な改革の最中（さなか）にあり、それはつまり懐かしき友人の結婚に託（かこ）つけて現場を疎かにしてはならないということである。

バーには三人の女と一人の酔っぱらいがいた。
「えへへ…このワイン、美味しいですねえ～何てお名前ですか？」巴里の婦女子にあるまじきへべれけな発音でエリカが言った。

「エリカさん…それ、ウイスキーです…」他に誰も客がいないにも拘らず、無性に恥ずかしい気がして花火は静かな非難の口調で正した。「へえ～良い名前ですね！私、このビール大好きです！」エリカはウイスキーのボトルに頬擦りをした――紅い、今にも爆発しそうな顔で。

「おいロベリア、そなたが少しと言うからエリカに付いて来たのだぞ…」グリシーヌは何処か煮え切らない風に言った。

「アタシだって止めようとしただろ！なのにこの馬鹿が聞かねえから！それにエリカを止められなかったのはアンタも同罪だ」

「その通りである…」責任の一端を感じてグリシーヌは身を小さくした。

エリカは酒場へ行くと言ったが、最早巴里の名物であるシャノワールの踊り子が朝から大衆酒場に出入りしていたところをファンに見られては一大事と、グリシーヌが取り計らってまだ開店準備中であった上等なバーで、一行は食事をすることになった。

四人に特別に出されたのはクロワッサン、スクランブルエッグ、ハム、サラダ、そして赤ワイン。至って健康的な朝食であった。

しかし談笑しながら三人が食事をしているうちにも、エリカはグラスのワインを一口で平らげ、態々予定外の接待をしてくれていた給仕にバックバーに置かれたあれやこれやの酒瓶を指差して運ばせたのである。

おいとグリシーヌが咎めると、グラスにちょっと注ぐだけですよ、そう言ってエリカはグリシーヌの警戒を緩めた後、自らへの視線が外された瞬間にワインもビールもウォッカもウイスキーも、何構わずラッパ飲みに供してしまうのだ。キャーと花火が叫んだ時には在るのは酒瓶のみ。そんなことが二度三度を超して四度五度。

これは不味いと三人が談笑を止めてエリカの監視に傾注すると、市井の修道女は酔いどれの弁士となって三人に絡み始めた。エリカと三人が会話になっているか怪しい会話をしている間にも、エリカは酒瓶との猛烈なベーゼを求める、しかし隣に座っているグリシーヌとロベリアは隙かさずその酒を取り上げる、二人がエリカの酒を捌くのに忙しいその虚を衝いて、二人が確保しもう安心と思っていた酒瓶にエリカは手を伸ばし、ぐいぐいとやる。エリカが正面に座っていた花火の、グラスにまだ残っていた赤ワインを指して「その白ワイン美味しいですか」と聞いたあたりから、グリシーヌとロベリアは制止することを諦めた。入店から数十分後、四人が囲む丸テーブル、そしてその下にはとても一人の人間が消費したとは思えぬ量の空のボトルが転がっていた。

「だぁ――大体ですねぇ…大神さんが…ヒック…大神さんが…えっと、何でしたっけ…」

エリカは頬擦りをしたウイスキーとはまた別の、新たなウイスキーを手にしていた。

「ああそうだ、そもそも大神さんがいけないんですよぉ…巴里華撃団のみーんなのお尻追っかけ回してぇ…」やれやれ――と言う表情で三人は酔っ払いの戯れ言を聞き流して

いた。

エリカは腕をグリシーヌの肩に回す。「グリシーヌさぁん知ってますか？大神さんたらグランマのシャワーまで覗いてたんですからぁ！もうね、大神さんは紛うことなき色魔ですよぉ」

「そなたの口臭、純粋なアルコールの香がする」

「色魔～降魔～大神さんは～…ヒック…大神さんは…」ばたん、とエリカはテーブルの上に突っ伏した。

「全く、何だというのだ！」黒を基調とした落ち着いた空間に、一人酔っぱらいの醜態だけが浮いていた。

「荒れてんなあ…こいつ」ロベリアがエリカを小突いた。エリカは起きない。「二人を見送る前、航海の無事を祈って一晩中お祈りをしていたと、エリカさん仰っていましたわ。きっと徹夜明けの妙に昂奮した気分だったのでしょう」

「神に祈った後にこの呷り方か…」

「おいグリシーヌ、この始末大丈夫か。アタシは一文も持ってきてないぞ」

「金のことなら心配要らぬ。問題はこの酩酊隊長だ」

「今日も今日とて訓練にレビュウですのに」

「ま、グランマにならテキトーな嘘をついときゃいいさ」

「はあ…これではアイリスとコクリコが居ぬ一ヶ月ちょっと、先が思いやられる…」
「まま、たまにはこんなこともあるわよ、グリシーヌ。エリカ隊長の日頃の行いに免じて――」花火は回想した。そしてエリカの日頃の振る舞いにこの有様を差し引きゼロに出来るだけのものがあるかと思案したが、雲行きが怪しいとみて途中でよした。「と、とにかくお仲間の失態をカヴァーするのも必要でしょう」
「ふむ…」グリシーヌはサラダを口に運んだ。「まあ、こやつが他人に何かを施そうとした訳でもなく、ここまでの粗相をすることは随分珍しいことではある」
「大神の結婚がショックだったのさ」出し抜けにロベリアが言った。「いつか大神の側で毎日朝飯を作るのはこの自分だと、この阿呆はそう考えていたに違いない」三人はしばし黙った。エリカの大袈裟な呼吸音だけが聞こえる。
「行きたかったです、帝都」湿っぽく言う。
「私(わたくし)もだ」
「同じく」
「大神さんとさくらさんの晴れ姿を見て、そしていつか、あの二人のお子さんが私達の許へ訪ねて来てくれることを楽しみにしていようって、そう思ったんです」
「上手くやるかね、あの二人」
「上手くやるさ」

「だろうな、きっと――」そして、ぐいとグラスを傾ける。「良いワインだ」
「さあ諸君、食事が済んだなら帰ろうではないか。シャノワールに」
「そうだな、大神が結婚しようがアタシらの日常は続く。象徴的な出来事があってそこで物語が終わる訳じゃあない」
「エリカさん、どうしましょう」
「両側から肩を貸せば何とか運搬出来ようか」
「世話の焼ける隊長だ」
　ほら行くぞと、ロベリアが半ば無理矢理にエリカの身を起こす。テーブルから引き剥がされたエリカの顔を見ると、その色は深紅を通り越して濃い茜(あかね)のそれに近付きつつあり、焦点の定まらない眼にぶつぶつと譫言(うわごと)を口ずさんでいた。「一緒に…ほんとの…」エリカの鯨飲など前代未聞であったが、同時にエリカのこんな無様も三人は初めて見た。大神一郎から巴里華撃団花組を任されて以来、エリカはエリカなりに真面目に隊長任務を果たしてきたのであり、それは三人もよく認めるところであったから、驚き一層である。
　店の外へ出ると爽やかな風が吹いていた。快晴、気持ちの良い春の日。人々で賑わい始めた巴里に、三人は歩いて、一人は運ばれて消えて行った。

　ロベリアは最後の気力を振り絞り、エリカを背負投た。経験に裏打ちされたフォームから繰り出された技は、正確にエリカをベッドに叩き込む。
　意外にもエリカの理性は霧散しておらず、ベッドに臥したまま片手を挙げて謝意を示した。ロベリアは苦笑いして、エリカの屋根裏部屋を後にしようとした。
　その時。
「ロベリアさん…」エリカがか細い声で呼び止めた。
「私、負けちゃったんでしょうか、さくらさんに…」陰気な声のその訳は、事実エリカが泣いていたからであった。
「何言ってんだよ隊長」如何にも阿呆らしと言った口調。
「負けたのはアンタだけじゃない」
「え？」
　エリカが聞き返す前に、レビュウまでに酔いを醒ましておきやがれ――と、ロベリアは扉を閉めた。
「おーがみさんっ！」
「エリカ君」
「どうしてエリカを差し置いてさくさんと結婚しちゃんたんですかあ！あの日！あの時

！エリカを抱き締めてくれたのに～！」
「いや、それはだね…」
「コラっ、エリカ。大神さんを困らせてはなりませんよ」
「あ、天使様！お祈りお祈り…」
「大神さんはさくらさんと生涯を歩むことに決めたのです。本当に大神さんを愛しているのであれば、その隣に居るのが誰であれ、応援すべきではありませんか、エリカ？」
「うう、でも天使様！エリカは本当に大神さんが好きなんです！」
「それならば…」
「いーえ、断然悪いのは大神さんです！女の子を散々誑(たぶら)かしておいて！男の人は心を動かした女の子に対し責任を取るべきです！」
「こっちにも天使様？天使様が二人…？」
「私は天使ではありません、ダークエリカです！」
「エリカ君が三人…」
「大神さん、どうしたんですか！」
「さくら君！えーっと、どういう訳かここにエリカ君が三人いてだね…」
「ええっ！どれが本物のエリカさんなんですか！」
「私です！」

「私です！」
「私です！」
「皆が手を挙げちゃ分からないです！」
「ちょっとお、私が本物のエリカ・フォンティーヌです！あなた方は偽物でしょう！」
「ですから私は偽物ではなくダークエリカと…」
「私だってエンジェルエリカです」
「もう、まどろっこしいです！誰がホントのエリカさんだろうが構いっこなし、大神さんに寄り付く女性は皆私が蹴散らして差し上げます！」
「さくら君！」
「破邪剣征、桜花ほーしーん！」
「きゃあああ！」
「さ、行きましょう、あなた」
「ああそうだね、さくら」
「お、大神さん…エリカはここに……」

鈍痛のする頭を抑えてエリカは独り言ちた。
「プリンの夢……？」

中篇

今日、エリカとグリシーヌは半日非番であった。エリカは暇があれば聖書を読むか巴里の甘味処巡礼に興じることにしており、今日も何れをしようかと思っていた折、グリシーヌが声を掛けた。

「そなた、我がブルーメール邸の模様替えを手伝ってはくれぬか」言葉には出さなかったがエリカが露骨な顔をしたので、グリシーヌは慌てて付け加える、流石に表現が悪かった。

「実は今日、邸の一部を孤児院に貸し出す為の作業をしようと思ってな。いや、メイドや孤児院のスタッフが主だって仕事をしてはくれるのだが、我が家に来る子供達の顔も見ておきたいところだし、私(わたくし)も手伝おうと思ったのだ。シスターであるそなたも来て、気の利いた事でも言ってくれれば子供達もこれからの生活に希望を持てよう。無論、礼はするぞ」グリシーヌの言葉を聞き、俄然エリカの顔は明るくなった。

「ふふふ、グリシーヌさん。グリシーヌさんが子供達に無償の愛を施そうと言うのに、どうして私がグリシーヌさんに対価を求められましょうか?寧ろ、グリシーヌさんの善行に手伝わせてもらえることが、最大のお礼です」

エリカのやや大仰な言い回しにグリシーヌは少々面食らった。だが、すぐに微笑みを返す。「そなたなら、そう言ってくれると思った」

「勿論です！さあ、張り切っていきましょう！」

貴族としての務め。その議論は浩瀚（こうかん）な書を著し得る程に興味深いものだが、グリシーヌ・ブルーメール、この若き貴女が至った結論は民に寄り添うと共に彼らを先導すること、就中（なかんづく）貧困の泥の中で生きねばならぬ人々に何をか為すことであった。

これは、実はエリカの功績に因る。以前に何度か、エリカがグリシーヌを修道院の救貧活動に連れ出したことがあった。そこでグリシーヌは巴里の霊的脅威に遭遇した時と、同じ衝撃を感じた。世には想像を絶する貧しく、切なく、侘びしい環境で生の蝋燭を融かしている人々がいるという事実を、その美しい青眼で受け止めたのである。

以来、グリシーヌは変わった。何かにつけ巴里の貧困に関する情報、そして彼らに対する施策についての情報を集めた。その勤勉さは真に貧者のことを考えたものであった、即ち徒（いたずら）に自己満足的な一時の慈善を良しとするのではなく、持続性のある、社会の弱い立場にある人々が頼ろうとした時にいつでも頼られる様なそうした行いをすべきだと考え、研究した。

調べば調べる程に、学べば学ぶ程に、グリシーヌの口から巴里の貧困の話題が上るこ

とは少なくなった。それは興味がなくなったからではない、彼らについて軽率にものを言えなくなったのである。

貧困とは社会構造によって生み出される。故にその改善は容易ではない。社会構造は鋼鉄以上に強固だからである。

しかしだからと言って、何もしない訳にはいかなかった。結局私一人の満足の為やも知れぬが――とグリシーヌは思いつつも、今の自らに出来る限界として、ブルーメール邸の一部を孤児達の為に使おうと決意したのである。

エリカとグリシーヌは屋敷の中を並んで荷物を運んでいた。二人の他にも大勢の人間が幾条を成しせっせと働く。必要な家具を運ぶばかりではない、今週から屋敷の増築工事も行われていた。二人が持つのは孤児らが使う調度品の数々である。

「ところでグリシーヌさん？お家の名前はどうするんですか？」ペンやノート、筆記具の詰まったバスケットを抱えながらエリカが言った。

「名前？」グリシーヌが視界を覆わないギリギリまで積み重ねて持っているのはテーブルクロス、どれも青色のものばかり。

「そうですよ。新しく子供達を住まわせるんですから、「グリシーヌさんのお家」以外にも表札が無いと変ですよ。まるでグリシーヌさんが勝手に子供達を住まわせているみたいな…グリシーヌさんはちゃんとした手続きを取った上で子供達と暮らすのですか

ら、それと分かる名前がこのお屋敷にないと」
「成る程。う～ん、でもそれは子供達が元居た孤児院の支部なり別館なりでよいのではないか？」
「グリシーヌさん？ちゃんと子供達の立場になって考えて下さい。そんな無骨な名前じゃ、子供達が誇りを持てませんよ」
「むう、それもそうか。確かに子らの感じ方は大切だな…」
「奥様、お早う御座います！」若い職人が前方にグリシーヌの姿を認めるや張りのある声で言う。それからも何人かの職人に挨拶をされた。その日初めて会った職人は、この様にグリシーヌに挨拶をすることになっている（らしい、グリシーヌが強要している訳ではない）。職人がグリシーヌに挨拶する度に、エリカは「奥様奥様（オクサマオクサマ）！」と言ってグリシーヌをからかう。男達の快闊な態度にグリシーヌはヒントを得た。
「決めたぞエリカ。子供達が住むこの屋敷はブルーメール邸と共に、「荒波を越える者共の家」と称する」
「スパルタっぽい名前ですね」
「彼らは望まなくとも、スパルタになるのさ――辛く厳しい環境を経て大人になることでな。この家に来て、そして出て行く子供達は運命の海原にあっても逞（たくま）しく舵を取る人物になってほしい……大袈裟と、笑うかエリカ？」グリシーヌはらしからぬ自信無さげ

な顔をした。

「まさか。ピッタリですよ」

子供達が使う予定の部屋――それはどれも巴里の一般的な住宅事情からして破格の広さだった――に日常、彼らが使う道具を並べていると、グリシーヌはいよいよ心が引き締まる思いだった。これからの彼らとの共同生活、決して楽しいことばかりではなかろう、けれども私は不愉快なことも含めて、彼らと同じ時を過ごしたいのだ。

エリカが人数分の筆記具があるか確認していると、外で子供らの戯れる声がした。グリシーヌはこの広き部屋の扉ほどの大きさもある出窓から、慈愛の表情でそれを見た。

「エリカ、私はこれから職人方と打合せをせねばならぬ。その筆記具を並べ終わったら、庭に下りて子供達の相手をしてほしい」

「任せて下さい。巴里華撃団花組隊長の本領発揮ですね！」

「おい、それだと私達を、そなたは子供扱いしているということになるが！」

激しい試合だった。エリカの顔面を打ち、脚を踏まれ、空を駆けた活躍にもかかわらず、エリカのチームは負けてしまった。あんまりエリカが身の負傷を顧みないので、一試合が終わると子供達の方から少し休んだらと言った。これくらいヘッチャラですよ、そう言い、頭よりぶっ倒れた状態からガッツポーズしつつ立ち上がった瞬間に、試合で

痛めた足首が悲鳴を上げたので、エリカは子供らの気遣いに甘えることにした。
子供達が無尽蔵かと思われる体力で、なおサッカーに興じている間、エリカは少し距離を取り芝の上に座した。丁度よいメタセコイアの木があったので、それを背もたれとする。
童らの声、職人が仕事をする音、青い空、流れる雲、そして万のものを照らす太陽。今自らが感じているのは平穏そのものだと、エリカは思った。
風はそよかに、火照った体を癒やすだけの冷たさがあった。そこでエリカが熱くなった呼吸を静めていると、十を過ぎて幾歳かという少年がおずおずと傍(そば)にやって来た。その顔つきが緊張していた故に、エリカは自らもやや姿勢を正して応じた。
「少年、私に何か御用ですか?」
その少年の身なりは他の子供達と同様に一目見て、物質的に恵まれていない環境で生きていることを悟らせた。単に着ているものが平均未満というだけではない、それは粗末なものを長年使い続けた見窄(みすぼ)らしさがあった。体の肉付も良いとは言えない。ただ、少年の瞳だけが修道女への畏怖に強張りつつも、俄(にわか)に輝いていた。
シスター、僕の書いた手紙を添削してほしいのです、そう少年は言った。「手紙ですか?」聞けば、以前孤児院に来た神父が子供らに手紙、そして詩の書き方を教えたらしい。そこでこの少年は感謝の意を込めて手紙を書いたのだと。答えは判っていながらエリ

カは問うた。「何方(どなた)への手紙でしょう?」エリカが聞いたのは友の名であった。

街角でよく配られている共産主義者のアジビラの裏に下書きされた少年の手紙を、エリカは読んだ。しかしその内容は取り立てて添削などするまでもない整った文章であり、恐らく辞書を逐一引いたのであろう、綴の間違いもエリカには見付けられなかった。

となると、問題は少年が手紙の草稿の下に、隠すかの様にして渡してきたもう一枚の方である。それは詩であった。男が女に詩を贈る時、それは大概一つの理由による。エリカは少年が本当に見せたかったものを解した。

春風の運びたる
　巴里に花の香(か)を　我に汝(な)を
汝の下されし慈雨
　我が心の　泉とならん
然れども
　天道の万人が為にある如く
汝が御徳(おんとく)
　卑しき鼠の為にあらざるなり
世の倣(なら)い

生けるものども　相似たるものを相好む
虫　鳥を愛さざり
　石　雲を愛さざる
人　我を見るならば
　天日目指す　イカロスと言うらん
然り　我の求むるは
　畏れ多くも　聖母なり
天秤が
　釣り合わぬものと　知りながら
矮小なる自我　如何とも
　此を抑うるに能がなく
我が内より出でし炎焔(えんえん)の
　冀(こいねがわ)くは我が骨を　灰燼(かいじん)に帰すまで盛らば盛れ
我と雖(いえど)もそうならば
　汝が美しきその御庭　或いは利するもあるらんと
そして春風吹いたらば
　花をば咲かせ　汝を楽しません

上等な詩とは言えなかった。しかしこの稚拙な詩が、そして詩を書いて愛を伝えようとする少年の直向さが、エリカをはっとさせた。

――燃えるような恋。萌えるような恋。

「少年？私は詩の良し悪しはあまり分かりませんが、一つ言えることがあるとすれば、私だったら、こんな卑下した詩は嬉しくありません」詩の出来には自信があったのか、少年は面食らった表情をした。

「恋の炎で僕は燃えちゃってますってトコまではいいですけど、それが自分を灰にしちゃって、それから後にあなたのお庭にお花を咲かせます…って、私が誰かから好きだって言われたら、断然！抱き締めてほしいです」少年は幼いながらのこの詩の技巧を、エリカに説明する。エリカはそれをウンウンと頷いて聞くがそれでも承服しなかった。

「私にはですねぇ、少年。お花を咲かせるの最後の行が、酷く消極的に思えるのです。自分の中で、あの人が好きで好きで堪らずに！炎まで出しちゃうにもかかわらず、どうして、本人に直接愛を伝えないのですか！別に釣り合わなくたっていいじゃないですか、もしかしたら向こうもあなたのことが好きかも知れないのに」エリカは愛についての持論を捲(まく)し立てる。少年は愛だの恋だの書かずにその意を伝えようとして詩を書いたにも拘らず、エリカが恥ずかしげもなくそうした言葉を使う為に、顔を赤くした。

「何と言えばよいのでしょう。少年、あなたの表現は謂わば静的なのです。プラトニックというのですか、こういうの?恋の詩を書く以上は、そんなんじゃ駄目です!」そこまで言わずとも、と少年は赤らみ照れながらの不満顔をした。
「という訳で、愛しきあなたは仔羊、私はそれを狙う狼で、隙あらばあなたを食べちゃいます!みたいな、動的な表現が良いですよ」
　エリカが勢いよく喋りまくった後、少年は圧倒されていた。単にエリカの語調が何かに憑かれたかの様に熱心だったというのもあるし、シスターが恋だなんて俗っぽいことをそれだけ語ることに驚いた。しかし一息ついて、風に髪をさらさらと揺らすエリカの横顔を見ると、エリカが少年の手紙を読みそうであった様に、少年もまた悟ったのである。
　シスター、恋した人がいたのですね。
　エリカは明らかに不意を突かれた色をした。しかし少年の方は見ず、子供らがサッカーをしている方を相変わらず見続けた。
「どうして、そう思うんですか?」非難めいていると聞こえなくもないエリカの語気に、少年は少々狼狽した。触れてはならぬ傷に触れたかと口ごもっていると、一転、エリカは「分かっちゃいますよね」と少年に微笑んだ。エリカの一貫しない態度に少年はきょとんとする。
「さーって!休憩もしましたし、そろそろ皆の方へ行きましょう、少年。このエリカ・

フォンティーヌ、皆さんへ新生活に向けたアドバイスをしちゃいますよ」

エリカが歩きながら言った。

「少年、今の詩の話は、半分冗談くらいに取っておいて下さい。私に詩の才能はないし、あなたが愛を伝えたい人物が、私が好きじゃないって言った書き方が好きな可能性もありますからね。でもこれだけは言えます」立ち止まり、少年の肩に手を置き、その目を見据えてエリカは口を開いた。

「大好きな人がいるのなら、愛を伝えるだけでは駄目なんです。あなたの大好きな人が、もしちょっとでもあなたの愛に振り向いてくれたのならば、次の愛の言葉を伝える前に、その手を握ってしまわねばなりません。そして、二度と解いてはならないです。あなたが大好きになった人は、他の人にとっても大好きな人でしょうから――愛は奪い取るものなんです」少年は黙って大きく頷いた。

見ると、エリカ達が向かっていた子供達の集団は二人から遠ざかる様に移動していた。「あれ、何かあったんでしょうか」子供達の行く先にいたのはグリシーヌであった。さっと、少年がエリカの後ろに隠れようとする。

「あ、そういうことしちゃうんですか。それなら――」と言って、エリカはグリシーヌの名を叫びながら駆け出した。少年はエリカが何を企んでいると思ったのか、シスター待って――と釣られて芝を蹴る。

グリシーヌは子供らに囲まれて笑みを湛えていた。

「おおう、どうしたどうした二人共！」

エリカは勢い良くグリシーヌに抱き着く。ただそれだけのことに一同は、邸の工事をしている職人も思わずにやける程の、大きな笑い声に包まれた。

季節は巡り、夏の陽を懐かしんでいるうちに冬の空が恋しくなる。万物は流転し、生き物は命の連鎖を営む。少年は青年となり、新入りが達人となる。そんな当たり前のことを、私は忘れていた気がします。この無常の世の中で、私の季節はずっと止まっていたのですから。大神さんに会ったあの日から、私の人生はずっと浮き立ちっぱなしでした。

少年には否定する事を言いましたが、でもホントはすっごく良く分かるんです、あの気持ち……もう大神さんと一緒にお花を眺められないのなら、いっそ大神さんのお家の花の、その一輪となって、季節毎に大神さんが、お庭の草花を愛でる中で私も見てくれたのならそれでいいって――

その歌は題して「祈り」と言った。お喋り好きの子供の一人が、二人はシャノワールの踊り子であることを言い出し、何か歌ってとせがんだのである。

では一曲だけ――そうした歌ったのがそれだった。その歌声は、青空の下に、ただ童らを相手としたものにしては、切なく美しく、聞く者をして思わず目を見張り黙させずにはいられない、つまり素晴らしいものだった。それはプロによる歌舞に不慣れな子供達だけではなく、いつも共に練習しレビュウをしているハズのグリシーヌでさえ、この時のエリカの歌が、真に迫るという点で異様な輝きを持っていることを感じた。

「たとえ未来ぃー…」歌うエリカは涙ぐんでいた。エリカの前に座した子供達は息を呑みながらその声を聞く。子供達の後ろにいた孤児院の保母が、隣にいたグリシーヌにそっと耳打ちする。どうやら、この保母はエリカが選んだこの歌の詞を聞いて、篤信なシスターだと感動したらしい。この保母はエリカの歌う「あなた」を神と解した様で、極めつけはサビの部分、「未来約されておらずとも、我は汝が為に生きん」、つまり死後に救済されることを貴方様がお約束になられなくとも、私は貴方様の栄光を讃う為に生きます、とこうだ。グリシーヌは敢えて保母の幸せな誤解を正すことはしなかったが、しかしエリカのこの歌声には、それだけ人の心を揺さぶるものがあったのだった。

歌い終わると子供達はありったけの力で拍手をした。「えへへ…どうもどうも」子供達に囲まれてエリカは照れる。だがグリシーヌはそのエリカの赤らんだ顔に、別の意味を見出した。

――何か、私に出来ることをせねば。

傾いた日差しがエリカの顔に影を作っていた。

後前篇

……そうした理由によりこの地区の治安は巴里中でも最悪であり、日々市警並びに行政を悩ますところである。最新のデータにおけるこの地区の霊的治安指数は九二、この指数が経験的な、信頼性の試験段階にある不安定なものであることを鑑みてもこの事実は等閑に附してよいものではないだろう。早急な調査を要する。

しかし巴里華撃団本部の妖力レーダーへの反応が確認出来ない以上、彼の地区で霊的脅威が醸成されつつあるにしても、それは現段階にては高い霊力を持つ者のみが感知出来る状況にあると思われる。なお調査に際し実動員の安全を確保する為に、市警は協力を惜しまない。

ついては調査の具体的な検討の為、速やかな返答を求む。

巴里華撃団本部、作戦司令室。連なる分厚い書物の数々、壁に掲げられたライラック家の先人の肖像画、古典ゴシック風の落ち着いた内装、その中でエリカは一人静かに調査の関連書類に目を通していた。身に纏(まと)うのはトレードマークの赤い修道服でも、また戦闘服でもない。それは地味な色合いに輪を掛けて着古しているのが一目で分かる

シャツにスカートで、よれよれの様は凡そ清新さからは程遠い。この工場労働者然としたエリカを、街で富裕な紳士淑女が見掛けたら哀れな娘と思ったことだろう。上着には男用のトレンチコートを用意していた。

　またエリカはいつもなら何らの拘束をしていない艶のある髪を、今は一つ結びに束ねていた。傍らには色褪せたハンチング帽。そこへ、エリカと同じ様に平素とは異なる成をしたロベリアがやって来た。ロベリアの見目もまた、踊り子たるの溌溂(はつらつ)さを感じさせぬ地味なものである。エリカは書類から視線を外した。

「よお隊長、待たせたな」

「今考えると、ロベリアさんは却っていつものアバンギャルドな格好の方が安全なのでは？」

「言われてみればそうかもな。ま、あの地区の「いつもの状態」を見たいんだから、出来るだけアタシらが調査することであの地区の雰囲気に与える影響は小さい方がいいのさ」

「なるほど」

「それじゃ、時間外労働と洒落こむか」

　二人は信頼の笑みを交わしシャノワールの裏口から夜半へ踏み出した。

その後、エリカとロベリアの両名は巴里市警の協力隊と合流、そこで作戦を確認した。エリカとロベリア、並びに協力隊第一班はその地区に足を踏み入れ調査の実働にあたる。その際、協力隊第一班は地区全体に散開しエリカ達から応援要請を受信した場合に、即時駆け付けられるよう備える。協力隊第二班は機関銃等による重装備で当該地区の周辺で待機し、事態の悪化に警戒する。

警察署の一角、協力隊の全員が入るには狭っ苦しい部屋。壁に貼られた市内の詳細な地図や事件に関するメモと共に、蒸気灯の光に照らされ薄暗い部屋に浮かぶ警察官らの目は、尊敬の視線を送っていた。その先にいるのは、彼らよりも一回り体格の小さなエリカである。彼らにとってのエリカは嘗て巴里を救った英雄であった。

グランマ立案の「巴里防衛新計画」では市警との高度な連携が謳われている。そこでは巴里市内における霊的早期警戒への協力が市警に主な役割として設定されていた。グランマの個人的な顔利きもあってその一部は個別的に、大綱からは先立って実施されていた。その際に巴里華撃団部外者への情報開示としては初めて、正式に市警協力隊の警官へ巴里花組に関する情報が一部共有されたのである。そこには乙女らが尋常ならざる力を有していること、乙女らはその能力を適切に行使するだけの良き信念を有していること、そして今日まで巴里が在るのは彼女らの献身的な活動があってのこと――などが書かれていた。五年前の「巨樹」事件では直接間接に、巴里花組の活躍に命救われ

た者も警官の中には大勢いる。ヤニ臭い部屋に似つかわしくない二人に、やもすると警察署のお偉いさんに払うよりも大きな敬意が示される所以である。

「――調査概要は以上です。質問のある方は？」

手を挙げる者はいなかった。何を欲しているのか、男達の目がエリカに語る。

「皆さん、くれぐれも当該地域への刺激には注意して下さいね。何分治安の悪い所で、皆さんが黙っていられないという場面にも遭遇するかも知れません、ですがぐっと堪えて下さい、繰り返しになりますがそうしたことまで含めて霊的脅威を把捉しなけれなならないのです。

では「グレート・プディング作戦」を開始します。各員、気を引き締めてかかって下さい！」

――ほう、なかなか良い男共だ。

大声で和し、気力滾(たぎ)らせる警官らを見てロベリアは一人愉快そうであった。

行政上の境界を越して数分とせずに異様な雰囲気を感じた。

臭い――処理の雑な屎尿の臭い、血の臭い、動物が腐敗する臭い、不衛生の観念とばかり接続される異臭ばかりが漂っている。また夜の闇を補う音も物騒なものしか聞こえてこない。喧嘩の声、怪しい薬の売人の声掛け、誰かが泣く声叫ぶ声。暴力が溢れて

いた。

人心の荒みは言うまでもない。路傍に屯(たむろ)している連中の通行人を見る猫の目、猜疑と品定めの目である。蒸気灯の光なき故分かり難かったが、ロベリアはその青年らが手にナイフを忍ばせていることを見抜いていた。手前ェらがアタシらに手ェ出そうってんならこっちも手前ェの首を飛ばす位の用意はあるんだぜ――そう威嚇するかの如く肩肘張ってカツカツと歩く。二人の変装は幸い上手くいっていた。女だというだけで命取りになりかねない緊張が張り詰めていた。

まともな街灯少なし、建造物密集、路は尽く狭し。犯罪の集まる良い条件が揃う地区、二人が歩くのはこの様な場所であった。

二人はなるべく人通りの少ない道を選んで歩く。そういう道こそ危ないのだが、ある意味では今の二人はその危なさを求めて歩いていた。

物乞いをする浮浪者を脇目に、時折二人は建物の壁の棄てられたビラを見た。『労働者による労働者の為の政治を！今こそ我が祖国には革命が必要である！』ビラの背景色に使われた赤色が鮮やかさに欠けていて何とも物寂しい。

「ポイント二の五――ルート通りですね。ロベリアさん、これまでに何か感じました？」

「いーや何も。市警による事前評価にあった通りだな…凶気はそこかしこにあるが妖力となると…」

「最深部まで行ってみなくては分かりませんね」
　警邏の際の道標として市警が偽装したアジビラを辿りながら、二人は奥深くを目指す。空には雲が立ち込めてますます行く手を不気味なものにしていた。

　それは恐怖の感覚と似ている。肌がぞわぞわと震え出す感覚である。調査開始から一時間、いよいよだとエリカとロベリアは思った。
　歩くのにすら難儀するこの暗中を辻(つじ)の如く駆け抜ける何かがいる。縦横無尽にこの地区の気の立った連中にぶつかることも厭わずに、動き回る何かがいる。形無き声無き存在、二人はそのモノを感じた。
　しかし様子がおかしい。以前に対峙した怪人らは斯くの如き不安定な存在ではなかった。人の形をし明瞭に自己を認識していた。その意味で彼奴らは人間と違(たが)うところ、ただ超常の力を有する点のみである。ならばある種のガスの如く渦巻くこいつらは何か？
「形態としてはとても原始的な気がします…怪人以前というか」
「ああ、こいつらは妖力が緩やかな纏まりを作っているだけって感じだ。もう少し経つと十分な力が集まって、何処からともなくこいつらは怪人としての体を持つ様になるんだろう」

「妖力の黴…」
「成る程ここはコロニーか」
「――！」
空中を漂う違和が集中して点となる、エリカは咄嗟にロベリアに警告しようとした――が、居るべき場所にロベリアはいなかった。
振り向くとあたりは漆黒が包んでいた。夜の暗さとはまた違う闇である。夜とは言え季節外れの冷気が肌を撫でる。エリカは完全に飲み込まれていた。
実体としての「街」は無くなっていない様子だった。建物は依然としてあるし路も路としてある。だが人気が一切攫われていた。それが証拠に今まで聞こえていた物騒な音が耳に届かない。少し路を戻ってみるとさっきまで浮浪者が寝ていた場所には誰もいない。
エリカはスカートを捲り特注のホルスターに収められた愛用の短機関銃「ラファエル」を取り出した。腰溜めに構え前後を確認する。我を攻撃しようという意志の他には何も感じられない。頭の中で警報がガンガンと鳴る。
――第一にロベリアさんの発見、第二に市警の方々への警告、第三に可及的速やかな脱出。
銃を握る手が汗ばむ。エリカは足早に移動を始めた。

暫くしてエリカは出会った。

「やはり…」

エリカよりもやや大きいそれは、正面から見ると上下に伸びた楕円形の如き様であった。だが上方に括れが、中程に左右対称の触手が、そして下半身が二つに枝分かれていることから人形を模していることが分かる。酷く歪な人形であった。またその形状は蠢いていた。比較的大きい「要素」が一定の規則に基いて緩やかに結合している様だった。そのモノ全体は黒かったが、結合しつつも蠢く「要素」の奥から時折青白い光が漏れる。

それはゴソゴソとエリカに近付いてきた。エリカは恐怖と闘志で引金を引く。

銃弾が当たった箇所ではそれの「要素」はバラバラと霧散する。それに伴って露呈した内部が一層の輝きを見せた。暗闇に慣れきった目に光が突き刺さる。

弾倉の半分も使う前にそれは、最後に閃光を残して消えた。すると路地の奥で「おーい」という声がした。エリカは走る。

人が二人並ぶことも出来ない狭い路を抜けると割合に大きな街路に繋がっていた。昼間であれば出店が並ぶであろう空間である。寒さがコートを抜けて柔肌に触れる。

他に誰もいない石畳の上に立っている者が一人。そいつは手を振りエリカは銃弾で返事をした。頬や頭頂から発光する人間はいないからである。そいつは又もや鋭く

光って煙の如く消えた。

「ふう」

――一々戦っていたらキリがありません…早くしないと…。

エリカは否が応にも十分に警戒していた。伝わってくるのである、あの妖気の塊から怨恨の情が、隙あらば相手の体を滅茶滅茶にしてやろうという悪意が。しかし一人で警戒出来る範囲は所詮限られている。特に今エリカのいる場所が防衛する者には不利であった。

敵の能力もまだ未知数故、遮蔽物のない広い空間を歩くのは危険と見てまた狭い路地を往こうとした時である。音もなく妖力の塊が現れた――建物の屋根からするりと落ちてきたのである。エリカの真正面、距離ゼロメートル。本能が呼び起こす一瞬の怯えが消え去ったならば、直ぐに弾丸を浴びせるつもりだった。だが敵はその一瞬を衝いた。

「あ…ぐ…」

手と呼ぶにはまだ未分化な触手がエリカの首を捕らえた。間近でそれの体表を見る。どうやら奴を構成する「要素」とは深黒の球体の様で、直径は手の爪の半分程。すぐさま右手で敵を狙うも触手で銃が叩き落とされた。エリカの足が徐々に石畳から離れていく。

触手から直接に敵の思念が流れ込んできた。

――やはりこのモノはこの地区に溢れる「憎悪」の集合体…まだ明確な自我も意志も目的も持たない…ただ己を構成する攻撃性の赴くままに行動しているだけです…。

呼吸が出来ずにエリカの意識は薄くなっていく。そこにこの妖力の塊の思念がエリカに伝わり、乙女の内を侵食し始めた。強烈な負の感情がエリカを支配しようとする。抗おうとするも克つだけの思考を巡らすことが出来ない。

だらり、とエリカの四肢は脱力した。するとそのモノは童が何処まで高くボールを投げられるか試す様にして、ぐいと触手を撓(しな)らせエリカを宙に放り投げる。エリカは路地を俯瞰する高さまで上り、そして頭から石畳に叩き付けられた。起き上がる様子はない。

征服欲を満たしたと見え、「塊」は次なる獲物を求めて闇のその奥へ――拙い足取りで――向かった。

後後篇

グランマと昼食をとっている時であった。エリカにとっては糖分摂取と同義であるその日課の後、珈琲を飲んでいる時にグランマから告げられた。

「えっ…アイリスが巴里華撃団を離れて陸軍の士官学校へ？」

「と言っても正規の学生じゃあない。特別研究生ってのが、向こうが用意してくれた身分だ。卒業は出来ないし公式の軍籍も与えられないけど、ともかくそこで本式の軍事教練を受けられる。エリカ、アンタには度々話していることだけど巴里華撃団はこれからどんどん強い組織になっていなかなくちゃならない。その為には少なくとも他の隊員を指揮する人間には、軍人としての教育を受けた者がいた方がいい…ムッシュ大神の様にね。

これは別に、アイリスが武者修行から帰ってきたらエリカを隊長の座から外して後任にアイリスを据えようって訳じゃあない。アイリスが華撃団に戻ってきても、引き続きアンタには花組の隊長を務めてもらう。その時、そしてそれ以後に、アンタには巧くアイリスとアイリスの智識を使ってもらいたいって話さ。隊長として意見は？」

唐突なことに、エリカは目を丸くしていた。「いえ、私からは特に――あ、ですがグラ

ンマ、それでしたら軍から教官を引き抜いた方が良いのでは？」
「遠からずそうする予定ではある。ただ、いきなりそれが出来ないのは、軍や軍に近い政治家に華撃団を警戒させない為さ。華撃団が軍事における陸軍の絶対優位性を脅かそうとしている――ってね。だからまあ当座の対応としてってことさ。それでもアイリスの担う役割は重要だけどね」
「ええ…」エリカは無自覚に、空になったカップを唇に当てて傾けていた。
　ブルーメール邸はグリシーヌの私室で、チェスをしていた。子供達の遊ぶ声も聞こえず、またカーテンが閉められ二人の視界は傍らの蝋燭によって維持されていることから、夜であると思われた。
　エリカもグリシーヌも黙って駒を動かした。時折グリシーヌが「そなた、もっと考えろ」とエリカにアドバイスする。ただその声、そして「はあい」と応じるエリカの声も、何処か気が抜けていた。
「実はな、エリカ。これはまだ機密扱いだとグランマから言われているのだが――」
「はい？」
「グランマは数年のうちに「巴里防衛新計画」に次ぐ第二の新防衛大綱――「フランス華撃団構想」を政府に上奏する。これは巴里華撃団の如き霊的防衛組織をフランス全土に拡大して設置、及び各地の組織を統括する一つの大きな軍令部を置こうというものだ。

つまり――」薄明かりの中でエリカの目を見詰めた。「いよいよ、我らは陸海軍の様に堅強な官僚組織を軸とした軍事組織へと変貌をしようというのだ」タンッと盤に駒が叩き付けられる。

「そうですか…」うん?その話って以前にグランマから聞いた様な…。

「そして、だ。グランマ曰く、未だに我が国では畏れ多くも国王陛下を始めとし、生まれつき高貴なる人間が一般国民からもそれなりに尊敬を集めている…そうであるから、貴族の称号を持つ者が組織の長となることは組織に対する一般の求心力を高め維持するのに効果的である、と」

「グリシーヌさん、説明が回りくどいです。はい、チェック」

「どあほう、その位置ではチェックにならんわ。で、その、つまり…フランス華撃団が日の目を見た暁には、私(わたくし)を総司令に任命したいと、そうグランマが言ったのだ」グリシーヌは無言で俯いた。

「え――」手元が狂い、エリカは駒を正しく盤に置き損ねた。ビショップの空襲を喰らい幾つかの駒が倒れた。

「おい、阿呆隊長、ここだけの話だが」

二人は雑踏を縫いながら歩いていた。市が企画した芸術祭だとか何とかで、いつも二人が歩く道にも人がごった返している。人と人の隙間たるや寸分になく、人波という言

葉が正に相応しい。
「アタシはそのうち、華撃団内部に新設される新部署に異動になる。帝都では月組って呼ばれていた連中の仕事を、アタシが巴里でやることになった。調査部隊、諜報部隊、影から花組を支える役目だ――」
　エリカは人の波に飲まれまいと必死に体を動かす。それを見てロベリアが手を貸してやる。「え！ホントですかロベリアさん！」エリカは周囲の声に紛れない様に声を張り上げる。
「ああ！」ゴニョゴニョと何か言った気配。「今何て言ったんですかー！」
「アタシにピッタリの仕事だろって言ったんだ！」ロベリアも大声で言った。「あの！エビヤンとも一緒に仕事をすることになる！随分気の利いたジョークだよ、全く！」ロベリアは大笑いした。そしてぐいとエリカを引き寄せたかと思うと、肩に担いだ。
「ちょっと、ロベリアさん！」困惑にエリカは手足をジタバタさせるが、ロベリアは素晴らしい平衡感覚で以て、普段よりも一段高い所の空気をエリカに吸わせた。街路には、ざわつき浮き立って足を運ぶ群衆すらも注目してしまう哄笑が通って行った。
「お二人、どうしたんですか、こんな朝早く、それにその格好」
　エリカがいつもの赤い修道服に着替えたばかりの早朝に、花火とコクリコはシャノワールの自室へ訪ねてきた。二人ともいつも着ている様なものではなく、品が良いとい

うか、普段着よりも上等な服に身を包んでいた。おまけに二人共、一人では持てなかろうという大きさの行李を運んで来ていた。
「まるで、何処か遠くへ旅行するみたいな…随分大袈裟な感じですが」
「そう、僕達、国へ帰ることに決めたんだ。僕はベトナムに」
「私は日本に」
「これから汽車に乗って港を目指す。そこで今日中に極東行の船に乗るつもりなんだ」
「ど、どうしていきなり、お国へ帰ろうと…」
「父さんの国を見たくなったんだ。僕の体に流れる血の半分は、ベトナムのものだから」
「私もコクリコさんと同じ様なものです。私は、日本で学問をやりたい。まだ日本では女性の大学進学は認められていませんが、女でも立派に成果が出せるってこと、証明してみせますわ」
　そう言うコクリコの顔は決意堅く、花火の顔は大きな野望に微笑していた。エリカは焦り言った。
「そんな、お二人共変ですよ。今まで一度だってそんなことを仰ったこと、なかったじゃないですか。ぱ、巴里に何処か不満なところがあるんですか?」縋る様な口調。
「そうじゃないよ…ただ、僕も今は十六になった——母に会いたい一心で全てを擲ちこの国へやって来た頃とは違う。色々、思うところも出来たって訳さ、青二才なりに」

「そんな…」
「この街、そしてこの街の人々には大変感謝しています。国籍も肌の色も異なる私達を受け入れて下さって…でもだからこそ、いつまでもその善意に甘えていてはいけない、自分が本来居るべき場所に居、そして自らの仕事を為すべきだと思うのです」
「おかしいです、間違ってます！」エリカは叫んだ。「この街に感謝していると言うなら、巴里に残って一緒に作って下さい、未来を！そうでなきゃ、恩知らずですよ二人共…」
　エリカは半泣きであった。しかしエリカが取り乱しても二人は一向気に介さない様子で、「じゃあ僕達行くから」とどでかい行李を両手で掴む。
「待って下さい！」
「エリカ、手紙書くよ。ベトナムから、僕の祖国から」
「日本の甘味には数週間保存の効くものもありますから、良い物がありましたらお送りしますわ。では、ご自愛下さいませ」
　エリカは二人を引き留めようと手を伸ばした。けれども触れようとした二人の肩は、閉まる扉の奥に消えた。ばたんと音を立てエリカと二人を隔てたそれは、エリカがノブを回さない限り壁と異ならなかった。

　エリカは母親に菓子をねだる子供の様に、泣き喚いた。

「皆さん、どうして私を置いていっちゃうんですか…私を一人にしないで下さい、私は巴里華撃団花組の隊長なんですよ」
「何れ、華撃団は秘密部隊ではなく公の組織としてフランスに君臨することになるわ。私がこれから勉強してくることは、その時、花組にもきっと役に立つ。待ってて、エリカ。必ず一人前の兵士になってくるから」
「私はアイリスにそんなこと望んでません。ただ、一緒に戦ってほしいだけなんです」
地面にへたれたエリカに、青の軍服を着込んだアイリスが目線を合わせる。そして堅く、エリカの手を握った。「じゃ、行ってくるわ、隊長」
「正直、私は偶像としての貴族というのは、好かぬ。高貴さとは、行為の実践のうちに見出されるべきことと思う。しかし私が王国の霊的防衛組織の長たることで、少しく民心が安んずるならば、敢えて持説を頑(かたく)なにすることもない。私に適任か否かは分からぬ…が、やってみようと思うのだ、エリカ」
「グリシーヌさんも、性急ですよ。お屋敷の子供達のことはどうなるんですか、彼らにはグリシーヌさんの慈悲が是非とも必要なんです。今のままだって、十分貴族の義務は果たせますよ」
グリシーヌはエリカの肩を抱いた。「エリカ、そなたとも、もう長き付き合いになるな…あの頃あの時、出会ったこと、戦ったこと、忘れたくとも叶わぬ。ふふふ――事を成

す場が違おうとも、志はおんなじだ」
「大悪党と呼ばれたこのアタシが！巴里市警と協力して霊的脅威に関する情報収集だなんて、まー面白い、傑作と言ってもいい。傑作！ならば上手く演じてみようじゃないか、このサフィール様の名演技、市警共、巴里市民の連中、そしてアンタに見せつけてやるよ」
　エリカは泣きじゃくった。「ロベリアさんに…そんなの務まるハズないですよ。ロベリアさんは花組にいて、光武に乗っているのが一番いいに決まってます」
　そのエリカの頭をロベリアは、ぽんと叩く。「アタシもよお、これから花組に入隊するガキ共には、今や霊力は劣るだろうけどさ。気に入らない怪人を丸焼きにするくらいは、どうってことない。だから花組がヤバくなったらいつでも呼びな。アンタらがアタシの登場に感動している間に、敵を完全燃焼させてやる。隊長も頑張れよ」
「不安もあるんだ。今更国へ帰って、僕に何か出来ることがあるのかなって。もしかしたら受け入れてもらえないかも――なんてね」
「だったら巴里にいたらどうです。この街の誰も、コクリコに文句なんて言いませんよ」
　帽子を目深に被ったコクリコは彼方を見詰めて言う。「でも、行かなきゃ駄目なんだ。この目で祖国の今を見なくちゃ。ベトナム人としての血が、僕を極東へと誘っている…」

「世界の強国と言えば欧米が先ず挙げられますが、世界の果てにあっては日本だって捨てたものじゃないんです。今や神埼重工の製品は世界中に輸出されてますしね。フランスがそうである様に、日本もこれからどんどん発展していきます。工場は建ち、蒸気の力は都から鄙(ひな)まで津々浦々に行き渡るのです。私、そうしたことを考えるだけでとってもわくわくしてきちゃって！」

「巴里は…巴里は世界一の都市ですう…ここには何だってあります――ここでの便利な生活を捨てて日本に行ってしまうなんて、花火さんは大馬鹿さんです…！」

花火は帽子が飛ばされない様に手で押さえながら、エリカに笑った。黒いワンピースが揺れる。「エリカさん。人間、やろうと思えば出来ないことはありませんわ。それは私達の蒸気社会が証明しています、だって、動物としてはこんなにひ弱な生き物が、これだけ素晴らしく力強い機械を大量に作っているんですもの。智性と情熱があれば凡そ不可能事はないんです。だから私は、私の本来いるべき国で、私のちっぽけな智識とローマンスとを燃やし尽くしたいんです！」

銘々別れの言葉を告げると、五人は身を翻し各々目指す方向へ歩き始めた。無様に泣くエリカはよろよろと立ち上がり、それぞれ違う方を向く五人全員の背中を追おうとする。けれども自らの足は石の如く重く、それでいて友は颯爽と光の彼方へ行ってしまいそうであった。

「待って、待って――」

エリカはそう何度も繰り返したが誰も止まることも、振り返ることもしなかった。伸ばした右手はただ虚空を掻く。するとエリカは、ただでさえ五人の背中が遠くなったというのに、躓き、転んでしまった。顔を地面と衝突させる。いつもならば何でもないそのドジが、今は酷く惨めに感じられた。地に臥し暫し寂しさを噛み締める。エリカは孤独であった。

「おい、大丈夫かエリカ！」

駆け付けたロベリアは石畳の上へ仰向けに倒れているエリカを見つけた。今宵は天からの光なく、この街路には蝋燭一本の明かりさえない。倒れている仲間を介抱するのに良い条件ではなかった。技術大国フランスと雖も、この時代、ポケットに入る大きさの便利で安全な明かりはない。しかし灯がなくとも火ならある。ロベリアは手先に丁度良い大きさの炎を発現させた。大きくはないが、力強く燃える頼もしい火であった。

肩を軽く叩きエリカの名前を叫ぶ。僅かに目尻が動くも明確な反応無し。いきなり抱えようとはしない。頭のみならず頸椎を強打している可能性があるからである。その場合、無闇に頭を揺らすのは生死に関わる。

焦る気持ちを抑え、ロベリアは爪先から頭までエリカの体を丁寧に観察した――が、

時間は掛からなかった。後頭部を見ようとエリカの首筋から手を滑り込ませた時、指先にぬるっとした感触がした。ロベリア自身も地に臥す様な姿勢でエリカの後頭部を覗くと、栗色の髪の毛の奥、比較的首に近い箇所から赤黒い液体が流れていた。

「畜生…！」瞬時に心臓の脈打つ音が激烈となる。ロベリアは携帯キネマトロンで市警協力隊に応援要請を送った。二人は計画した順路からそう大きく離れていないハズで、十分も掛からずに協力隊の誰かは二人を発見出来るだろう。それまでにやれることを――ロベリアは大悪党現役時代の悪事を為す時の手際で処置を始めた。

まずエリカとは正反対の方向に落ちていた「ラファエル」を持ってくる。弾倉を外し槓桿（こうかん）を引き、ついでに明後日の方向に一発撃ってみて、安全に使えることを確かめる。次にロベリアはコートを脱ぎ、エリカの首の太さを確認しながら適当な大きさにそれを畳んだ。銃を頸部固定の柱とし、コートをそのベルト代わりにしようという訳である。市警の応援が来たらそいつらの上着も借りて、上背に銃床を固定させる為に一着を、後頭に銃身を固定させる為に一着を使う。

だがエリカは頸椎を損傷している疑いが濃い以上、ロベリア一人ではこの作業は出来ない。一人ではどうやってもぐらぐらと頭を動かさねばならないからである。結局、ロベリアは待つ外になかった。

――大丈夫だ、落ち着くんだアタシ。この阿呆は自分の頭に衝撃を与えるのが大好き

な女じゃないか。今更一つや二つの傷くらいどうってことない、どうせ今回だって幸せに天使サマを見ているに違いないんだ。

コートを脱いだ身に夜風が吹いた。ロベリアは何かをしたい一心でエリカの手を握る。見れば首全体が赤紫に腫れていた。細いものではなく、太く大きな一本の紐なり縄なりで締め上げられた痕である。

――やはり奴らに！

ロベリアも数体の「塊」を焼殺してきたところであった。エリカ同様、気が付いたら敵の能力に引き摺り込まれており大慌てでエリカを探していたのである。

昏睡するエリカの顔には表情がなかった。苦悶の色がないと言えばそうだが、かと言って安らかに眠っているとすれば適当でない。力の抜けた顔であった。

ロベリアが祈る気持ちでエリカの顔を覗いていると、エリカの目蓋が動いた気がした。

「エリカッ…！」ロベリアの声は起きない人間に対する悲痛の呼び掛けではなかった。それはギリギリまで手を伸ばせば届き、掴むことが出来る人間に対する一声であった。思わず強く握り締め過ぎたロベリアの願いが、夢に引き込まれるすんでのところにいたエリカを呼び戻した。

「…ロ…リア…さん…」

驚いたと同時に胸を刺される様な思いがした。

――まともに呂律が回っていない、それってかなりヤバイってことじゃないのか――クソっ、どうしたら…！

エリカの二つの眼球は覗き込んだロベリアを確かに追った。しかし集中が維持出来ない様子で、すぐに何もない中空に視線を泳がせてしまう。

たどたどしい発音でエリカの唇が動く。「ロベ…さん…で…よね…私（わらひ）、どぉして……」ロベリアは必死で耳を傾けたが聞き取れなかった。何とか言葉の意味を推測してエリカを再び昏睡させまいとする。

「エリカ、多分アンタは怪人の攻撃をまともに食らったんだよ、それで頭と首を強く打っている…まあ凡人ならなかなかヤバそうな状況だが、アンタなら大丈夫さ」精一杯の笑顔を作った。エリカは返事をした…ようにみえた。

「さっき市警の連中に応援要請をした。すぐに助けが来る、そうしたらそいつらと一緒にアンタをシャノワールまで運んで帰ってやるから、アンタは何も心配しなくていい。ただ頭を動かさず、上を見ていな」エリカを安心させたい一心で、普段は到底言わぬことまで口を突いた。「そ、そうだエリカ。シャノワールに着くまで、ずっと神サマにお祈りしてな。ほら、空の向こうには神サマがいるんだろ」

「お…祈り…」

――通じたか！

今のは確実にアタシの喋ったことに反応しただろうと、ロベリアはほんの少しだけ安心する。思考能力が壊滅的な打撃を受けていない証拠と信じたかった。するとロベリアはエリカの片手がピクピクと動いているのに気が付く。

「…て……て…」

「て…？手か、エリカ？ああそうか、お祈りをする為に手を結ぶ必要があるってことだな」

この光景を見てやはりロベリアは泣きたくなった。

「ああ、分かったよ」

普段のエリカはまるで自分とは異なる構造の体を持っているかの様に、走り回り、跳ね回り、転げ回る。人の身で為し得る動作の限界に挑戦しているかの如き無鉄砲、それがエリカ・フォンティーヌという隊長。そのエリカが今、自分の手すら結べないという。

ロベリアがお祈りのポーズをさせてやると、エリカは再び目を閉じた。

「そうだエリカ、アンタの霊力は確か人の傷を癒やすことが出来たハズだろ、アレを自分に使うことは出来ないのか」

「れ い …く…？…」

「神サマの奇跡だよ。神サマにお祈りするんだ、私の体を治して下さいって」自分でも情

けないと思う声色で言った。見ている傍(はた)から小さくなっていく生命の灯に、ロベリアは何とか空気を送り込もうとする。

「…み…さま…」

エリカは天に向かって絞り出す様に呟いた――光、あれ。

「！」ロベリアは驚いてエリカの全身を見た。目の錯覚によるものかと疑う、だがそうではない。エリカを桜色の輝きが包んでいた。刹那、ロベリアは呆気にとられた――だが、次の瞬きをする前にエリカの両手をしっかりと握り、己の掌に全霊を込める。

――やりやがった！

桜色の光耀(こうよう)は徐々に強くなっていく。最初は暗闇にぼうとエリカを浮かばせただけの明るさが、ロベリアの　影をはっきりと作り街路を昼間の如く成らしめた。数分と経たぬうちにすぐ傍にいたロベリアが、エリカの体が見えない程にまで輝きは強くなった。それでもロベリアは目を瞑りエリカに霊力を送り続ける。

天まで届かん勢いで焚き上がるのその強烈な光輝は、一つの路を満たすばかりではない、角を曲がり壁を越えて遂には地区全体を燦然たる命の輝きで抱擁した。荒(すさ)み傷ついた人心も、徘徊する悪しき塊も、しばしその光の慰撫を受ける。今宵この時この地区の空を見上げた者は皆一様に言う、天使がここに降りてきたのだと。

市警協力隊の数人が辿り着くと、エリカの傍らにロベリアが草臥(くたび)れた風に座していた。「よおアンタら…へへへ、ウチの隊長ったらやってみせたぜ…ははは…」

ロベリアの雰囲気がおかしかった為に、まるで怪異に近付くかの様に協力隊は慎重に歩み寄る。直ぐに様その理由は分かった。ロベリアは泣いていたのである。

「アンタらも見ただろ、あの馬鹿でかい光を？口も利けないくらい弱っておきながらあんな力を発動するなんざ、やっぱりこいつは大した女さ…コンチクショウめが」

協力隊の中の用心深い一人が、ロベリアが乱心した可能性もあると考えそっとエリカの脈を確かめる。果たして脈拍正常、おまけに胸が大きく上下していた。

「こいつは恐らく頭を強打していた――首だって締められて腫れ上がってたんだ。それなのにさっきので頭の傷は跡形も無くなっているし、首は絹の白さに戻っていやがる。ホント、どっちが怪人なんだかって話だぜ…はは――」

協力隊の警官らが反応に困っているのを見て、ロベリアは涙を拭き立ち上がった。

「アンタらを呼んだのはこのエリカが敵の攻撃を喰らってヤバそうだったからだが――こいつの怪我は取り敢えず心配要らなくなった。調査は完了さ。さあ、帰ろうぜ」

警官がエリカの体を丁寧に抱えようとする。しかしロベリアが、

「いや、アタシが連れて帰ろう」

と言って、疲労困憊しているハズの身にエリカを抱いた。

「ったく、赤ん坊みたいにすやすや寝やがってよ……」

目を醒ますと、見慣れた天井に嗅ぎ慣れた匂いがした。

雲が所々に浮かぶ青い空の下、心地良く風の吹く草原に立っている様な、太平然とした気分。日常は次から次へと雑事がやって来るけれど、今この瞬間だけはそれら一切から解放されている様な気がする。

傍らの椅子に腰掛けていたグリシーヌはエリカが起きたことに気が付いた。読んでいた文庫本をぱたりと閉じる。

「エリカ、起きたか」

「グリシーヌさん」エリカは身を起こした。

「体の調子はどうだ。何処も痛まないか」

「ええ…とっても、良い気分です」

「で、あろうな。そなたが寝ている間に医者が随分調べていたが、健康体そのものと結論して帰って行った――そうだ、水でも持ってこようか、エリカ?」

「ええ、お願いします――ですがその前に。ロベリアさんは…私、ロベリアさんを探している時に敵の襲撃を受けたんです」

「自分の前にまずロベリアか。その話は水を飲んでからでも遅くない。待っておれ」

　グリシーヌはすぐに帰ってきた。病後の様な気の抜けた顔をしていたエリカだったが、コップ数杯の水を立て続けに飲み干す様を見て、確かに大丈夫そうだとグリシーヌは大いに安心する。
「ロベリアなら怪我もなく、今もグーグー寝ておろう。奴は何時ぞや――と言ってもそなた覚えておるか？――の様に、そなたをこの部屋まで運び、しかも着替えの世話までしたのだぞ」
「無事なんですね、良かった――それにこの服もロベリアさんが…」エリカは自らの服を見る。それは汗と油で化粧したあのボロっちい服ではなく、上下白の清潔な病衣であった。「後でお礼を言わねばなりませんね」
「そなたの体調に関してだが、ロベリアの話に拠ればそなたは後頭部を負傷していたそうだ、まともに会話も出来ぬ程にな。その時の記憶は？」
「ほんの朧気に」
「ふむ…そしてその傷だが――」
「神様が奇蹟を」
「そう、そなたの言う神の奇蹟が顕現しそなたを救った」
　グリシーヌはエリカの能力が発動した時の様子をロベリアから聞いていた。ここ一番という時に大した体力と霊力だ――とグリシーヌは改めてこの隊長の内に日頃は潜

在している力に驚く。
「そなたの敬虔さは主の御墨付きということであるな」
「えへへ…グリシーヌさんも私を模範としてくれてよいのですよ？」
「それはお断りだ」くすくすと二人で笑った。
「それと、グランマが調査報告書の提出は明日の昼までよいと言っていた」
「了解です」ほら、日常は私を捉えて離さない。
「ああ、グランマで思い出した、エリカが目を醒ましたら連絡しろと言われていたのであった」グリシーヌは携帯キネマトロンを取り出しカチャカチャとやる。
——あの実態が不安定な、他者に対する敵意ばかりが先行していた様な怪人…というよりも妖力の集合体。あれを発見出来たのは幸運でした。これで嘗ての様に怪人が強い力をつける前に、こちらから先手を打つことが出来ます。
しかしエリカは静かに唇を噛む。情けない結果であった。
隊長たる自分がやられていては他の隊員の指揮はどうなる、今回の調査は事無きを得たものの一歩間違えれば隊全体を危機に陥れかねない大失態だった…と、幾つもの自責の言葉が胸に過る。内心に冷たい感覚が残った。
——出来るだけ早期に、あの地区の霊的掃討作戦を——
次の作戦案が浮かび、エリカは壁に掛けてあるカレンダーを見た。

「！」そして浮かんだ案は消えた。
「グリシーヌさん、今日は何日ですか？」ぱっと明るい顔で問う。
「うん？」送信ボタンを押したグリシーヌが顔を上げる。「今日は――」グリシーヌが答えたのは帝都で大神一郎と真宮寺さくらの結婚披露宴が行われる日附であった。
「やっぱりそうですよね！アイリスとコクリコが巴里を発ってからそろそろ三週間、そう言えばあと数日のハズだって思っていたんですケド！」
　グリシーヌは急に緊張した顔つきになった。「ああ、そうだな、今日は隊長とさくらの披露宴の日だ…」
「ふふふ…あーあ、私も行きたかったなあ、帝都！羨ましいです、二人共」からりと言う。対してグリシーヌの口振りは湿っぽかった。
「私もだ」
「えーっと、巴里と帝都の時差ってどれくらいでしたっけ」
「八時間だ」
「それですと？日本はお日様が昇る国って自称しているくらいですから、帝都の方が進んでいるって計算すべきですよね…あれ、私の懐中時計は何処に…」
「そなたは懐中時計など持っておらぬだろう。帝都はもう日没だ」
「あれ、私そんなに寝ていました？」

「無茶を言うな。死んでもおかしくない容態だったのだぞ」
「それもそうですか。そうだ、披露宴のタケナワは過ぎてしまったかも知れませんが、お祈りしましょうよ、グリシーヌさん。お二人の前途を祝して」
「そうだな」ぎこちなく笑った。
　両手を胸の前で結び目を閉じる。二人の視界は仄暗さに覆われた。
　暫しの沈黙の後であった。強張った声でグリシーヌが言う。「エリカ、こんな時に何だが――そなたには言わねばならぬことがある」
「はい？」
「大神隊長の影を追うのは、もう止せ」
「えっ…」
　グリシーヌは息が詰まりそうな気分に、何とか肺から空気を捻り出そうとした。「そなたが隊長を好いておるのは承知だ。しかし隊長が生涯の伴侶に選んだのは――そなたではない。その現実を受け入れて、前を向いて歩くべきだ」
　エリカは言葉を返さなかった。
　目を瞑ったまま、グリシーヌはなお続ける。「確かにあんな男と人生を共に出来るのであれば、苦しきことも易く、楽しきことは一層愉快に生きられるであろう。だが世の中の男は大神隊長ただ一人ではない、そなたが心を開いて街を眺めれば気に入る男を見

付けられぬことはないハズだ。だから、だから…」

　目で見ずともエリカには友の感情の流露が分かった。

「もう、どうしてグリシーヌさんが泣くんですか。こういう場面で泣き出すのは、普通私の方でしょう」その声がグリシーヌの張り詰めた心を優しく包み込む。

「だって、そなたの気持ちを思うと胸が痛うて痛うて…」

「グリシーヌさん、耳を澄まして下さい。ほら聞こえるでしょう」

　そう言われてグリシーヌは何とか嗚咽を抑え込み、静かに届くその音を意識した。天から落ちた雫が、屋根を、窓を、道を、巴里をそっと鳴らしていた。

「グリシーヌさんには、前に言いましたっけ…？私、以前は雨が嫌いだったんです。イヤなことがある時は決まって雨が降っていて…まるでジンクスの様に。けれど、そんな考えも百八十度塗り替えられちゃいました――大神さんが巴里に来てから。

　大神さんが帝都へ帰ってしまっても、雨があると思い出すんです。大神さんが巴里に私達に注いでくれた、あの素晴らしい愛を」

「エリカ…」

「昨晩、私は一瞬の幻影を見た気がします。どんな幻だったかさやかには覚えていませんん、ですがとっても寂しいものでした。まるでーっごく広い場所に一人取り残された様な…。

グリシーヌさんが仰ったことは、よく分かっています。そして告白すれば、正直、非常にショックでした…大神さんの結婚。大神さんとの思い出丸ごと忘れてしまいたい程に。

でも、あの幻影、あれは怪人の能力によるものでしょうが、私への警告だと思いました。このままウジウジしていたら、誰とも手を繋がず誰とも抱擁せず棺(ひつぎ)に入ることになるぞって。そんなのはノーサンキューです、愛あればこその命ですから。

諦めがつく――って、なんだか如何にも負けた人間の表現みたいで好きじゃありませんが、まあそんな感じです。大神さんとさくらさんの結婚は虹なんです、きっと…。美しい、けど触れることは出来ない。ならないものねだりをしたって仕方ありません。空に架かった虹を見て、その綺麗な景色を心にピンナップして、また生きるべき日常へ帰っていく…」

「それがそなたの出した結論か」

「はい」

「そうか…僭越なことであった」

「ただ――」

降る雨に気持ちが溶けていく。

「今日、このおめでたい日だけは、濡れる街並みに大神さんの横顔を重ねさせて下さい」

エピローグ

　シャノワールのホールに五人の悲鳴が響いた。昼食のデザートにとエリカが出してきたプリンがエリカお手製と分かった為である。全員断固拒否、席を立とうとすると異変に気が付く、腰及び両足が麻縄で椅子に括られていた。
「おいフザケンナこの野郎、いつの間にやりやがった！」
「皆さんの考えなど私にはお見通しです。ささ、これはアイリスとコクリコが帰国した時に出すつもりなんですから、ちゃあんと感想お聞かせ下さいね！」
「それにしても凄い技術です。五人中誰にも気付かれずに縛ってしまうとは…」
「関心しとる場合か花火！」
「うぇえん、何でアタシ達まで――！」シーが椅子諸共倒れんばかりの勢いで体を揺らした。
「エリカさん！お二人のことを思うならプリンを出さないのが一番です！」メルも必死にエリカを説こうとした。
「あーあ、皆さんいけませんねえ、そうやって偏見に塗(まみ)れた認識は。無知蒙昧から脱するには経験を重んじる外にありません。という訳で！」エリカは轟々に罵るロベリアの口

にプリンを掬ったスプーンを突っ込んだ。
「んんん！」
その光景を見て四人は再度絶叫する。目の前で斯くも残虐なことが行われようとは、数分前の五人は想像だにしていなかった。
「ああ、お父様…先立つ不孝をお許し下さい…」
「エリカ、考え直せ！まずは…そうだ、ナポレオンに食べさせてみろ、そうすればそなたがしようとしていることの意味が分かる筈だ！」
傍らでその痴態を見ていたナポレオンが悲痛に鳴き逃走した。
「あ、さっき作業で使ったフォールディングナイフ！」メルがポケットから取り出したそれはデュランダルの如き輝きを見せた。
「ヒュウ！さっすがメル！早くアタシの縄も切って下さ～い！」
「……美味い」
ロベリアの一言に四人はフリーズ、エリカはへへんと満足気な顔をした。
花火は生気を失った表情で言う。「ロベリアさん、正気を…」
「まさかエリカさん…」メルがエリカに送る視線は恐怖に染まっていた。「良からぬ葉っぱを――？」
「い、幾ら何でもそれは酷すぎます！ロベリアさん、ちゃんと皆さんに説明して下さい

！」

「ったく、何でアタシが…」元々腕は縛られていない。ロベリアは自分でスプーンを持ってプリンを食べ始めた。四人はその光景を禍々しいものを見る目で観察する。

「いや、アンタ達、実際これは美味いぞ。かなりイケる。まるで店で売ってるみたいな口当たりに味わい深さだ。シー、アンタが作るよりも良い出来なんじゃないか？」

「ええっ！」それは心外とばかりにシーもスプーンを手にする。「……ホントに美味しいですぅ」

　他の者も半信半疑でプリンを口に運んだ。一口目はゆっくりと、二口目からは呑み込む前から次の一口を掬って。

「エリカさん、済みませんでした。まさかこんなに美味しいとは…」

「そなた、まともな料理が作れたのだな…」

「あっ、この期に及んでそんな失礼なこと言うなんて！おかわりも用意していましたが、グリシーヌさんにはあげませんからね」

　グリシーヌは慌てて言った。「待て待てエリカ、私(わたくし)が悪かった。このプリン、文句無しの一品だ」

「ふふふ！」

　実は持って来た中にはエリカの分もあったのだが、五人の手が止まらない様子を見て

自身の分も求められるままに渡してしまった。白昼の惨劇が一転、長閑（のどか）な昼休みに様変わりである。

「ところでエリカさん、こんなに美味しいプリンいつの間に研究為さっていたんですか？」花火が不思議そうに聞く。

「レシピを作り始めたのはもう大分前になりますかねぇ…特別な日の為にと思って。あ、因みにこのプリンは何時までも「開発途中」ですから！プリン道は終わりなき道なのです…」

「甘党の面目躍如だな」

「ええ！私の甘さに対する感覚は一般的な人の十倍もの…」

「何だか雲行きが怪しくになってきましたね…」

「エリカさぁん、このプリンならシャノワールでお客様にも出せますよぉ、きっと」

「え！シーさんホントですか～！それは大感激ですぅ！」

「正式にはオーナーに掛け合ってみる必要がありますけど…レシピはメモしてありますかぁ？」

「ええ、ここにあります」エリカが取り出したのは便箋であった。

「じゃあそれを…」

「あ、ちょっと待って下さい！」エリカは大慌ててフロントへ行き、そこに置いてあった

ペンでレシピに筆を入れた。書き加えたのはレシピのタイトル、元書いてあったものを一部修正したのだった。

「どれ、私にも見せてくれ…」便箋を受け取ったシーの背後にグリシーヌが立つ。ブルーメール邸でもそうそう食べられぬ味に感心し、普段は料理などしないがレシピが気になったのである。

「シャノワールのためのエリカスペシャルプリン…」そして何本かの横線で消された元のレシピ名を見た。

「…そうか」グリシーヌはエリカに微笑んだ。「良い、名前だな」

　エリカもまたいつもの如く朗らかに笑った。

「おいおい、グリシーヌしっかりしてくれよ。それの何処が良い名前なんだ？安直すぎだろ」また一口ぱくつきながらロベリアが言う。

「まあまあ良いじゃないですかロベリアさん。もしかしたらシャノワールの新名物になるかも知れませんよ」

「美味しいプリンに私達のレビュウ、相乗効果でますますお店が流行るといいですね」

「ええ、お店で出すとなれば是非山の人に食べてもらいたいです」

　止まらないスプーンを握る手は、五年に亙(わた)るエリカの愛の研鑽が無駄ではなかった証拠であった。始めは一人の笑顔だけを思っていた。けれど今、仲間が笑い、これから

もっと多くの人々がこのプリンで喜んでくれるかもしれない。幸せな気分だった。

そして胸中で呟く。

――いつか。いつか食べに来て下さいね――お二人で。

終わりのテーマ：祈り